

高齢者ホーム最前線



「いつまでもアクティブに！」を願って、リハビリテーションに力を入れる

プラチナ大和

「いつまでも、自分の足で歩きたい」、入居者のそんな思いを実現しようと、住宅型有料老人ホーム「プラチナ大和」では専門の理学療法士を常勤させ、リハビリに力を注いでいる。その効果もあつてか、施設内はいつも明るく活気がある。



エントランス右手のフロントでは、スタッフがいつでも笑顔で迎えてくれる



1階のダイニングルームは、いつも入居者の笑顔が絶えない

神奈川県小田急江ノ島線の高座渋谷駅を降りて、徒歩3分。そこに住宅型有料老人ホームのプラチナ大和がある。エントランスからロビー、ダイニングへと入っていくと全体的に「明るさ・解放感」を感じる。

「ホームは生活の場なのだから、ここち良さ、真の豊かさを感じられる建物にしたい」と生活空間のゆとりにこだわりました。窓も大きく、晴れ

た日にはよく日が差し込みます。そう語るのは、施設長の今野智之さん。たしかに高い天井に大きな窓は、落ち着いた色合いの家具、そして視界を余計なものが遮らない、洗練された空間だ。

「明るさ」は入居者の「アクティブな生活から見える」

プラチナ大和の「明るさ」はホームの設計や内装だけではなく、

「入居者の方は、部屋にじっとしているよりも、こつやつとダイニングで気の合う仲間とコーヒーを飲んだり、サークル活動をしたり、新聞を読んだりしています。元気な方が多いので、近所の大型スーパーへの買い物が日課、というような方もおられます」と今野さんが話している

P176に詳細データ



各フロアにはカラフルなミニラウンジがあり、入居者のくつろぎの場になっている



「パーから入居者の方が「ただいま」と笑顔で帰ってきた。この入居者の元気がもう一つの明るさ。そしてそれがプラチナ大和の強みの証でもある。

プラチナ大和の運営は、医療と介護の分野で30年以上の実績を持っているツツイグループ内の株式会社ツツイ。介護予防に関して早い時期からリハビリテーションの重要性に着目し、人材育成、身体機能維持のプログラムの開発などを行ってきた。

専任の理学療法士が常駐し、一人ひとりに合ったリハビリを

「介護を必要としない体を維持しよう」という介護予防が叫ばれている。それは多くの高齢者の願いでもあるし、プラチナ大和の願いでもある。

常勤の理学療法士が週2回定期的にグループリハビリを行い、また、それぞれの身体機能に合ったプログラムを用意し、個別にリハビリを行っている。

「入居者一人ひとりの健康状態をしっかりと把握することが重要です」と話す理学療法士の川俣淳さんは、個別に問診や触診をするだけでなく、ケアスタッフとの情報交換にも積極的だ。

「ご高齢になりますと神経関係が衰えたり、間接の軟骨がすり減ったり、骨が湾曲して手足が不自由になる方が多い



常勤している、理学療法士の川俣淳さん

ですね。高齢者ホームは医療現場と違って目標が完治ではなく、現状維持です。入居者に合わせて、リハビリのプラン、筋力アップ方法を考えています」（川俣さん）

「今の生活を維持する」ことがプラチナ大和のリハビリテーションのモットー。そこから元気で明るい入居者たちの笑顔がこぼれてくるのだ。



落ち着感と解放感のある居室は、もちろん「住み心地」を意識して機能性も備えている



今野智之 施設長



川俣さんは一人ひとりの身体的状況を把握して、それぞれに合ったリハビリを提供している